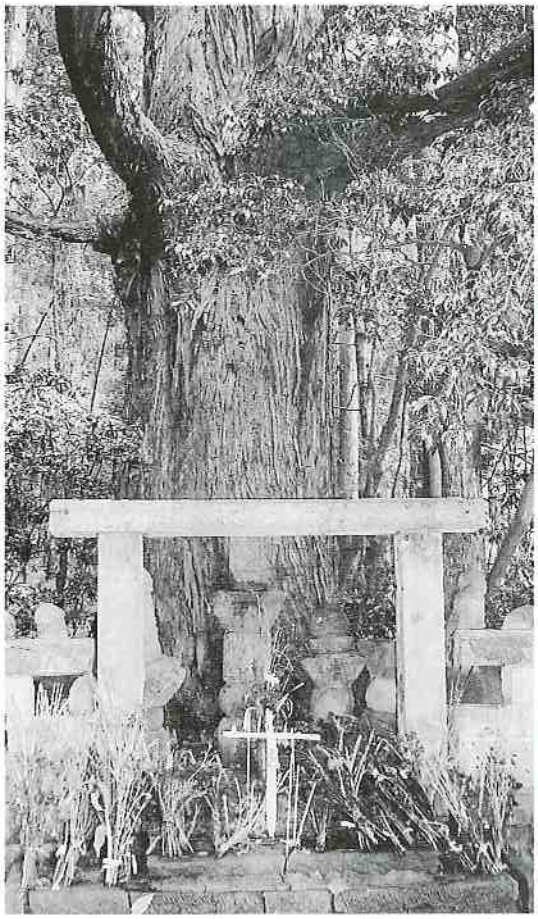
かも市史だより

平成17年9月
No.12

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■特集－加茂次郎義綱伝説をさぐる－■



▲　**加茂次郎義綱の廟所**　左は小貫、右は西光寺。中央上は『東講商人鑑』（安政２年〔1855〕刊）に載る小貫、中央下は『加茂案内図』（明治32年〔1899〕刊）に載る西光寺の廟所

越後の歴史・民俗を彩る加茂次郎源義綱が没しておよそ九百年。ここ加茂の地では、今なお義綱公にまつわる逸話が語られ、ゆかりの地や社寺がいくつかあります。昭和二十年に没後八五〇年祭を挙行した小貫の義綱公神社では、五十年の時を経て、今年再び記念の祭礼が営まれます（十月九日）。こうした時宜に鑑みて、源義綱の事績と伝承を探ってみましょう。

〔黒鳥征伐伝承〕

応徳元年（一〇八四）、奥州安倍氏の一族黒鳥兵衛が越後に乱入、乱暴・略奪を働いた。時に、無実の罪で佐渡へ配流された加茂次郎源義綱の武勇を聞き及んだ越後の民は、彼に黒鳥追討を願った。越後出馬を決意した義綱は秘術を使う黒鳥の前に苦戦するが、ついに凱歌をあげる。だが矢傷がもとで、ここ加茂の地に没した。

この伝承には賀茂神社・八幡神社・西光坊など加茂市の社寺や地名が多く登場し、古来格別に親しまれてきました。

義綱伝説の形成過程

源義綱は加茂のシンボルのように語り伝えられていますが、その伝説はいつ頃から形成されたのでしょうか。物語が固定化されたとみられる、江戸時代の史料などからこれをみてみます。

①最も早い記録としては、万元上人の「吾妻乃道の記」（天和二年〔一六八二〕）があります。これには、

・加茂社と八幡社が加茂次郎義宗の草創
・八幡社が義家の廟
・西光寺近くの加茂次郎義宗の塚
・寺の持仏堂に安置する位牌に「安国院道阿泰山居士　長治二年八月十八日」とある

▶**「吾妻乃道の記」**　八幡と御廟の部分（新潟市　笠原泰氏所蔵）

▶**『越後国村名尽』**　表紙（左、新潟県立図書館所蔵）と義綱加茂社参の部分（下条涌井洋一氏所蔵）

②次いで青海神社の宮司古川右近の正徳二年（一七一二）の「覚」があり、源吉家と源吉宗（義綱のこと

十八日」とあるなどを記しています。まだこの時点では黒鳥兵衛のことは触れておらず、黒鳥伝説とは結びついていなかったようです。ほかにも義綱を義宗と書くなど義綱伝承も曖昧です。

加茂次郎源義綱とは

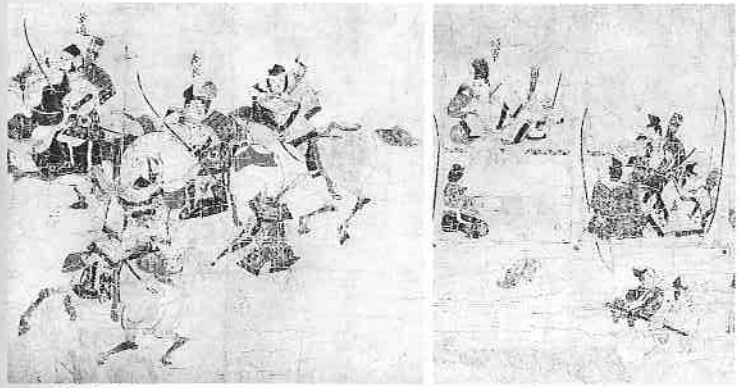
源頼義の子。京都賀茂社で元服して加茂次郎と号す。生年は不明であるが、同母兄の義家が長暦三年（一〇三九）の生まれ、同母弟の義光が寛徳二年（一〇四五）の生まれであることが参考になる。

父頼義にしたがって兄義家とともに前九年の役に出陣。凱旋後の康平六年（一〇六三）に左衛門少尉に任じられた。以後、たびたび白河天皇の行幸や摂関家の護衛をつとめたが、やがて兄義家と対立、一時は合戦寸前にいたった。その後、陸奥守となり、寛治七年（一〇九三）に出羽国で起きた平師妙・師季の叛乱を鎮定して名声を高め、さらに美濃守を歴任するなど兄義家をしのぐ勢威を示した。

しかし、天仁二年（一一〇八）に義家の子義忠を殺害した嫌疑が義綱父子にかけられ、当時十四歳の義家の孫為義が追討に向かうと、義綱の子ども五人が次々に自害、すでに六〇歳代なかばに達していた義綱も出家して陳謝したが佐渡国に配流された。その後、義綱の無実が判明したが、二四年後の長承元年（長承三年説もある）に再び追討を受けて自害した。

（考古・古代・中世部会　桑原正史）

▲源義綱自筆書状※1



▲前九年の役出陣の様子（右）と行軍する義家の軍団※2

※1　安田元久『源義家』（吉川弘文館）より転載
※2　「前九年合戦絵詞」『続日本の絵巻』第十七巻（中央公論社）より転載

か）が黒鳥退治の時に、加茂神社・青海神社に参詣して、つつがなく勝利したとの伝承を記しています。黒鳥退治の伝承と結びつけた最初の記録です。

③また寛延二年（一七四九）の「西光寺境内絵図」には、本堂裏手に「加茂次郎御廟所」と、廟所が描かれています。

④また地誌の類では、宝暦六年（一七五六）序文の『越後名寄』に、黒鳥兵衛のことが記され、前九年の役（一〇五一～六二）の後、黒鳥村（現新潟市）に黒鳥兵衛一平がおり、これを義家と義綱が征伐したことが書かれています。この後、あい前後しながら、『西光寺縁起書』や『越後国黒鳥根元記』、『越後国村名尽』などに、加茂次郎源義綱が黒鳥兵衛を征伐する物語が書かれるようになりました。

＊　　＊

以上の記録を通して言えることは、義綱伝説は神社勧請伝説などから、江戸時代初期からその原型があり、約三〇〇年前、これに黒鳥征伐の形が加わり、約二五〇年ほど前に各種の伝説・物語が出来あがります。その後、安永年間（一七七二～八一）にさらに物語性のある『越後国村名尽』として完成していったとみられます。同書には加茂神社や八幡神社の神徳をたたえ、蒲原や加茂の地名につながる武将名や人物名が登場し、また加茂と全く無関係とは言えない城名や地名も出てきます。

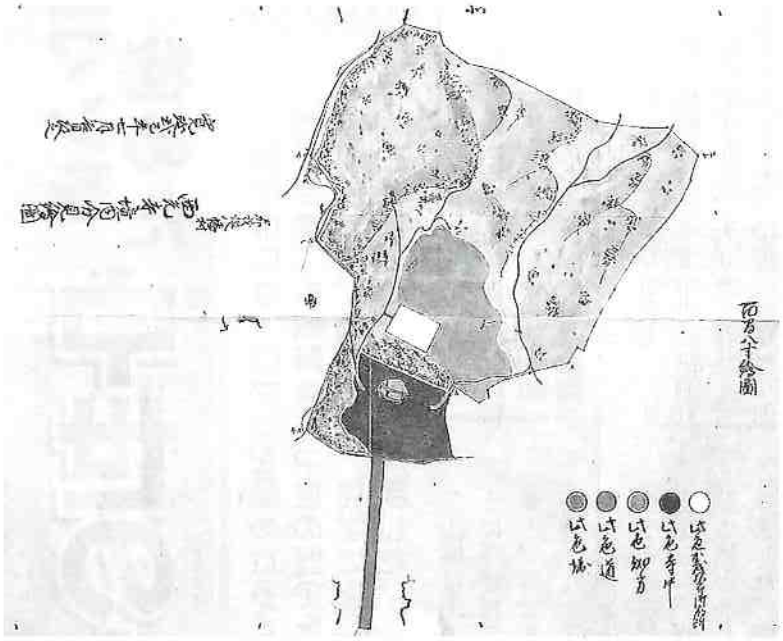
この物語の写本が、村から村へと広がり、源義綱の黒鳥兵衛追討の物語として、現在まで伝えられてきました。

右の『越後国村名尽』の作者を、上条村の籠作り長右衛門（俳号左月）とする説は、すでに幕末の国学者雛田葵亭や明治初期の小池内広も説くところで、井栗村松川牧牛の俳諧書『伊久里之藤』（安永五年刊）に左月の句もあり、その実在が確認されています。

『越後国村名尽』の説話が成立してからすでに二三〇年余りになりますが、説話が伝承化し、さらにこれにまつわる地名や史跡に擬せられた場所もあって、ある種の信憑性を帯びて、加茂地域、あるいは蒲原全体で根付き伝えられてきました。

廟所が加茂の小貫と西光寺の二か所に、史料の上でも寛政五年（一七九三）の村明細帳で確認できます。何故、廟所が二か所に伝わったのか、伝説がどうして生まれたのか、なども含め、その背景となった事象の追及もしたいものです。

（近世部会　関　正平）



◀**「西光寺境内絵図」**（新発田市立図書館所蔵）　境内をあらためた時のようす、白い部分が加茂次郎御廟所

▶**『越後名寄』**　黒鳥兵衛の部分（新潟県立図書館所蔵）

義綱公――私の体験――

駒岡　石沢秀五

義綱公については、明治十九年生まれの父に聞いて育った。昔は八月十三日に西光寺へ行くと、必ずみなさん義綱公のお墓へお詣りしてね。廟所へは履物を脱いで登壇し、それからお明かしやお水をあげたものだった。昭和三十年代には「義綱公顕彰会」という組織もあったが、時代は変わるもので、近頃は履物を脱いでお詣りするなどみんな知らないんだ。

（談、大正十一年生）

小貫　番場英一

義綱様には春秋二度の祭りがある。かつて九月の秋祭りでは十四日と十五日の晩、あの狭い庭に櫓を建て、太鼓を叩いて盆踊りを踊った。秋祭りのクライマックスだ。何年頃まで続いたものだったか・・。

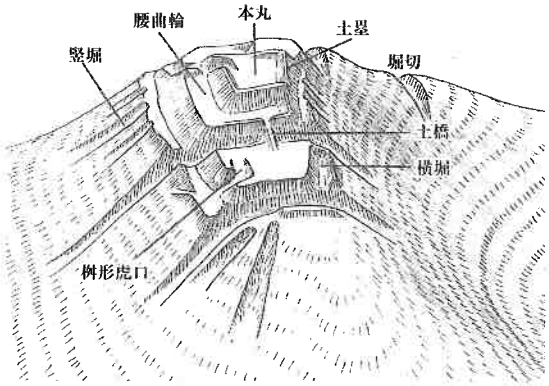
義綱公の話は孫じいさま（明治九年生）に抱かれながら聞かされた。昔は誰でもそうして育ったんだ。昭和三十年は義綱公の没後八五〇年にあたるというので、地区民はみな数年前から意識していた位だったよ。仮設舞台を造り、芸能社を呼んで芝居をみせたり、花火を上げたりして大層賑やかだったが、いずれも義綱様の氏子たる小貫の衆だけでやり遂げた行事だった。（談、昭和四年生）

ロマンを秘めた 中世の古城

加茂市には、ロマンを秘めた多くの古城跡があります。古城跡は、中世の歴史を物語る大切な遺跡です。ここでは、見学に適したいくつかの古城跡の姿を眺めてみました。

中世の城とは

城といいますと、白亜の天守閣や高い石垣のある大阪城や名古屋城を思い浮かべられるようですが、このような城は近世に築かれたものです。市内の城跡は、すべて中世に築かれたものですから、天守閣も石垣もありませんでした。中世の城には、山城と館の二つがあります。



▲ **山城の見方**　山城は曲輪や土塁、堀切、横堀、竪堀などを備えていた※

山城は山の上にあるため、そのように呼ばれています。城跡に行きますと、今でも段々になった平地や土を盛った土手、窪んだところがみられます。平地は建物があった曲輪、土手と窪みは敵の侵入を防ぐ土塁と空堀です。曲輪には簡素な小屋や物見の櫓があり、周囲に柵を巡らしていました。空堀は水のない堀のことで、堀切と横堀、竪堀の三種類があります。このほか、門を構えた桝形虎口や土橋もあります。また、山城では飲み水の確保も重要でした。

◀ **山城と館の想像図**　山上に戦時に詰める山城、麓に館がある※

館は城主が居住した屋敷で、山城の麓にありました。館の周辺には、一族や家臣が屋敷を構えていました。そこを根小屋といいます。城主は戦の時だけ、一族や家臣を引き連れて山城に立て籠もったのです。

加茂山の城砦群

青海神社裏の加茂山には、要害山城と剣ヶ峰城、城山砦（通称「尼新山」）の三つの山城跡があります。この三つの山城は、城の造り（縄張りといいます）に共通性が認められますので、密接な関係（一つの城）にあったものと思われます。要害山城の北麓一帯は、根子屋と呼ばれ、ここに城主の館や家臣の屋敷が構えられていました。

加茂山の城砦群
右から要害山城、剣ヶ峰城、城山砦が一直線上に並ぶ。要害山城の麓に「根子屋」、「根古屋」の地名がある

※ いずれも『週間朝日百科 日本の歴史』21より引用

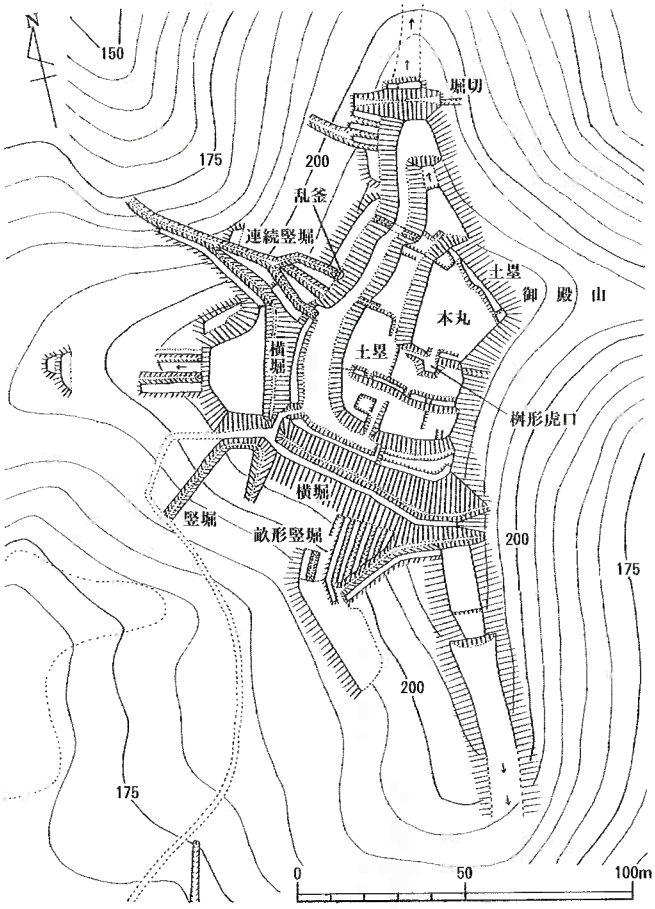
要害山城は、山頂部の本丸を中心に、十字形の尾根に曲輪や堀切を配置しています。剣ヶ峰城には曲輪と堀切、城山砦には曲輪があります。加茂山の城砦群は、戦国時代後半の山城で、新潟県内の山城の中では、大きい城の一つに数えられます。

天正八年（一五八〇）の御館の乱では、加茂山の城を守る景虎方とこれを攻める景勝方との間で、激しい戦いが繰り広げられました。

狼煙台が残る姫ノ城

山新田の南西、三条市保内との境にある標高二一六㍍の姫ノ城山には、姫ノ城跡があります。

この城は小さな山城ですが、山頂部に高さ一㍍ほどの土塁で囲んだ狼煙台があります。新潟県内の山城の中で狼煙台を備えた城は、姫ノ城を含めても数例しかありません。緊急の時にここで狼煙をあげて、近くの城や麓の村に急を伝えたのです。



▶ **高柳城の縄張り図** 土塁や横堀、畝形竪堀、桝形虎口など、戦国期山城の遺構が歴然と残されている

▶ **薬師山城跡の堀切** 断面形態はV底の薬研堀である

黒水にある二つの山城

黒水（上黒水を除く）には、二つの山城跡があります。一つは加茂川右岸の標高一九〇㍍の薬師山に築かれた薬師山城、もう一つは加茂川左岸の丘陵上にある西ヶ峯城です。

薬師山城は、土塁や二重堀、横堀、桝形虎口の発達に戦国期山城としての特色を残しています。七谷地区の山城の中では、中心的な存在の城です。西ヶ峯城には、曲輪状の平地や小規模な堀切がみられますが、全体的な城の造りは不鮮明です。

では、同じ集落の二つの山城は、どのような関係にあったのでしょうか。城の造りからは、築かれた年代が異なることも考えられますが、薬師山城が黒水を支配した領主の城、西ヶ峯城が戦の時に村人たちが避難した村の城との見方もできます。

中世山城のモデル高柳城

上高柳の北、標高二五五㍍の御殿山（中大谷では要害山と呼んでいます）には、高柳城跡があります。集落内の真言宗本都寺は、高柳城主北川大学の祈願所と伝えています。

この城は小規模な山城ですが、土塁や横堀、連続竪堀、畝形竪堀、桝形虎口をコンパクトに配置しています。これらの防御施設は、いずれも戦国時代の後半に発達したもので、この時代に高柳城の周辺で軍事的な緊張があったことを示しています。また、戦の時に隠れた乱釜と呼ばれる横穴もあります。まさに中世山城のモデルともいうべき城です。

▶ **高柳城跡の横堀** 主郭部の西側から南側を取り巻いている

南北朝秘話を伝える嶽山城

宮寄上岩野集落の南、水源地近くの標高二四二㍍の熊野山には、嶽山城跡があります。

嶽山城は、山頂部の本丸から東麓にかけて数多くの曲輪を配置し、背後に三条の深い堀切を備えています。今に残る城の形は戦国時代のものですが、南北朝時代の山城は標高の高い山岳地帯に築かれたという特徴がありますので、城の始まりは南北朝ころと考えられます。

この城には、南北朝時代に南朝方の新田義宗が立て籠もり、ここで亡くなったという秘話を伝えています。近くの段ノ平には、義宗の墓と伝える五輪塔と多くの塚群があります。

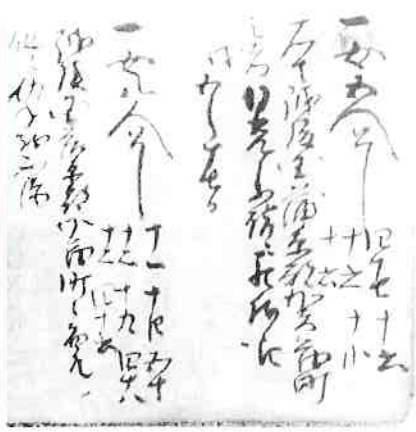
古城跡を歩いてみよう

このように、中世の古城跡は限りないロマンを秘めています。幸い加茂市内では、加茂山と姫ノ城、薬師山城、高柳城、嶽山城それぞれに遊歩道や林道が整備されていて、容易に古城跡の姿を観察することができます。

多くの市民が古城跡を訪れ、肌で古城跡を体感し、中世のロマンに浸っていただくことを願っています。

（考古・古代・中世部会　鳴海忠夫）

探しています



◀ 嘉永三年（一八五〇）、加茂町からの五人と八人のグループの記録

江戸時代の八十里越の史料

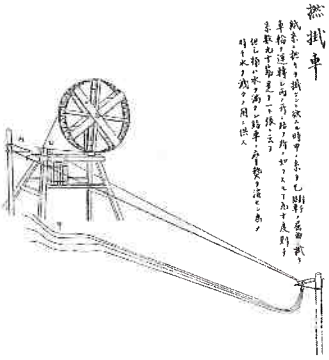
◆ 八十里越を越えた叶津番所に、幕末の嘉永元年（一八四八）から八年の間に、越後国蒲原などから日光参詣の旅人が越えて行った記録があります。加茂近在からの数は四四グループ、一三三人に上り、しかもほとんどが女性で、年令も七～七十三歳です。

こんなに日光参詣の記録があれば地元加茂にも何かしらの古文書が残っていて良いはずです。皆様の中で、日光参詣に関した、あるいは聞き伝えがありましたら、情報をお寄せ下さい。

加茂名物 元結・水引の史料

◆ 加茂は和紙の集産地で、また和紙を原料とした元結や水引も加茂の産物として有名でした。幕末、元治元年（一八六四）の『越後土産』に小結に番付けされているほどです。

すでに水害や火災で無くなったかと思いますが、元結・水引に関した記録や道具類のことについてお知りでしたら教えて下さい。



▲ 元結のもとの「こより」を作る撚掛車

（以上近世部会）

教育の記録を求めています

◆ 戦時中の、加茂の公立学校（小学校・中学校・国民学校など）での教育について、以下の資料を求めています。

a. 教員をされていた方の活動記録。ノートや手帳、メモや日記、学級通信などどんなのでも結構です。

b. 出征した教え子の便り。

戦前の婦人会の記録

◆ 戦時中の婦人会活動に関わる記録や証言を求めています。会議や集会の案内、参加者のメモなどが残っていませんか。

▲ 戦前の婦人会員　タスキには「大日本国防婦人会」とある（加茂新田 大野良造氏所蔵）。

大正の大水害と加茂川改修

◆ 大正十五年七月末から八月にかけての大水害で、加茂川は大改修の必要を迫られ、その年末以降新しい護岸工事が行われます。しかし、この計画書や設計書などの基本資料が見当たらないのです。情報をいただけませんか。

加茂地方

一橋も殘らず

全部流失

絶海の孤島化した慘たる加茂町

◇第一報◇

光寺橋其他の橋梁は

大橋も

遂に破壊

全町大混亂

▲ 加茂地区の惨状を報ずる「新潟新聞」記事（大正15年7月28日付）

（以上近現代部会）

『加茂市史』
資料編１古代・中世
大・好・評・発・売・中
■ 規格　Ａ５判、本文３４５頁
■ 体裁　上製本、ハードケース入り
■ 価格　１部２，５００円
～目次より～
－青海郷から青海荘へ－
－戦乱の世－
－天下統一と検地－
以 下 続 刊

編集後記

現代日本の生活上の急激な変化は、しばしば言及されるところです。この間豊かさや利便性を得た一方で、いかに多くのものを失ってきたか痛感されます。

今号では義綱公の小特集を組みましたが、往時を知る方の体験を聞くにつけて、過ぎ去りし日々の記憶を少しでも記録に留めることで、風化に歯止めをかけたいと思うばかりです。